



手術看護認定看護師 松下賀津江 (PHS : 3905)

非麻薬性鎮痛薬について

術後の患者さんにとって、疼痛は最も不快な症状の1つです。術後疼痛管理がうまくいかないと、離床が遅れ様々な合併症の誘因となります。今回は静脈注射として疼痛管理に使用する非麻薬鎮痛薬の特徴と使用時の注意点についてお伝えします。

弱オピオイド

- ・ソセゴン
- ・レパタンなど



- ・麻薬の処方箋がいらぬオピオイド
- ・作用発現時間は3分
- ・作用持続時間はソセゴンは1時間、レパタンは3時間
- ・天井効果があり、増量しても一定以上には効果が増強しない
- ・オピオイドと併用すると作用が拮抗してしまう恐れがある
- ・悪心に注意が必要

弱オピオイドは効果がマイルドで早く効く、使いやすい薬剤です。しかし使用しても疼痛がコントロールできないときや悪心があるときには他の薬剤への変更を考慮しましょう。副作用として呼吸抑制を起こす可能性があり、ソセゴンには血圧を上昇させる効果もあるのでバイタルサインの変動に注意しましょう。

PCAなどで麻薬を使用中は、鎮痛効果が拮抗してしまう恐れがあるので、PCAの組成を確認してから投与しましょう



NSAIDs

- ・ロピオン



- ・NSAIDsのなかで唯一の静注製剤
- ・傷口から放出される痛みの原因物質を作らせない作用がある
- ・作用発現時間は10分
- ・作用持続時間は4時間
- ・炎症を抑える効果がある
- ・アスピリン喘息、消化管潰瘍、腎機能障害の患者への投与は禁忌

呼吸抑制の心配がなく、副作用が少ない、長く効果が期待できる薬剤です。解熱効果も強いので、発熱中の患者さんに使用するときには急激な解熱により血圧低下を起こす恐れがあるので注意しましょう。また、過敏症をおこす恐れもあるため、喘息・顔面紅潮・鼻汁・鼻閉などの症状出現に注意しましょう



アセトアミノフェン

- ・アセリオ



- ・世界中で最もよく使われている解熱鎮痛薬の静注製剤
- ・局所と脳に作用点を持ち、副作用がない
- ・作用発現時間は15分（15分かけて投与する）
- ・作用持続時間は4時間
- ・短期間での大量反復投与で肝毒性による中毒性を発症する

単独での鎮痛効果は強くありませんが、併用することで他の鎮痛薬の使用量を減らし、副作用を減らすことができます。定時投与して血中濃度を下げないように使用すると効果的です



それぞれの鎮痛薬には一長一短があります。患者さんの早期回復を推進するために、また患者さんの苦痛がより最小限となるように、薬剤の特徴を理解し、術後ケアに繋げていきましょう